

わかり、自分でできるための支援
(製作活動)

製作活動では、手先の不器用さ、空間認知、イメージと関係し、発達障害以外でも不得意が出やすいので、対象児に行う手だては他のこどもにも有効です。

クラスに複数の保育士がいる場合には、支援が必要なこどもを同じ机に集めて援助すると個別に対応でき、こどもが出来上がりを急ぐことなくゆっくり対応することができます。

〔児童の姿〕

〔具体的支援〕

〔具体的な状況〕

指先が不器用で折り紙が上手く折れない。



・きれいに折れるように、最初の折り目を予めつけておく。
・折り方や工程がわかるように手順表を準備する。⑧

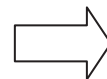


・最初の折り目がきれいにできると比較的スムーズに製作をしている。
・手順表があることで、全体の流れや仕上がりがはっきりわかり自分で確認している。

絵がなかなか描けない。
どう描いていいのかわからない。



・『顔って丸いよね』『髪の毛は黒かったね』などとイメージを持たせたり、記憶を思い起こしたりできるよう実物や写真を手元に置くなどして、描き始めのきっかけを作る。

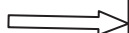


・**こだわりがあるこどもは、きれいに折れないと達成感もてなかつたりするので最初の折り目をつけてきれいにできるようにします。**

・**工程数は年齢に見合ったものにします。**

・そばで声をかけられたり、実際に描いてもらったりすると描き始めるようになる。

文字に興味があって書くが書いた文字が鏡文字になっている。



・保育士も横で同じように「この字はどう書くんだったかな？難しいね」などと言って書き、こどもの気持ちに添いながら正しい文字を意識させていく。



・**絵がかけないこどもはイメージが弱いことが多いです。絵のイメージの弱さを補うために、出来上がりがそのものを表すものから始めます。粘土の型抜きやスタンプ、絵では絵描き歌、基本図形を使った構成など、これらができると自由画が楽しめるようになります。**

・保育士の書く文字を見ている。自分の書いたものと見比べて保育士の書いたように書いている。



POINT

一般的に絵画製作ではこどもの表現を大切にすることを優先しますが、不器用さがあったりイメージが弱いこどもには、スキルを教えることが大切です。造形は認識(文字の基本)になるので、できたことを評価します。

何でも赤で描く、緑で描くなどのこだわりがある場合は正しい認識のため、目や髪の毛は黒というように、マーカーやクレパスの色を指定するほうが良いです。



POINT

間違いを訂正するのではなく、正しい文字を知っていくことが大切です。「この字は難しいね」と時には間違えて書いて見せることで、おとなも間違ふことがあると知らせ、間違いを気にすることなく興味を持って活動できるようにします。